の援助国の一国に数えられる経済的基盤が世界から認知されてもきた。

その状況を背景に、ここには三人の大統領が登場する。

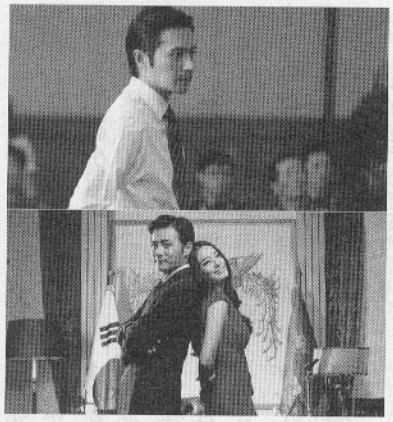
主にテレビドラマで活躍する老優で自身も国会議員の経験を持つイ・スンジェが演じる老大統領、ご存知韓流スターのチャン・ドンゴン演じるシングル・ファーザーの青年大統領、そしてベテラン母親役女優コ・ドゥシムが演じるのは韓国初の女性大統領である。四〇代（韓国大統領の被選挙権は四〇歳以上）の青年や女性の大統領就任は斬新だし、彼ら三代の政権が交代する度に与野党も交代しているという設定は民主主義のお手本みたいだ。

とはいえ、単なる民主主義賛歌に終わっているわけではない。なにしろ監督・脚本は、監督作『ガン&トークス』（〇一年）で知られ日本にもファンの多い韓国映画界きっての才人チャン・ジンなのである。随所に風刺や皮肉がこめられる。チャン・ドンゴンを「オナラをする大統領」にしてしまうアンチ権威主義は、筋金入りのものだ。

ロト籤で当てた大金を国民に隠れて蓄財する誘惑にかられる老大統領の姿は、現実の大統領たちの不正蓄財や収賄疑惑を明らかに反映している。青年大統領が陥るジレンマが国民の人気を獲得するためのポピュリズム志向の産物なら、女性大統領が直面するのは男性中心の韓国社会との葛藤だ。まだまだ古い社会の意識は根深い。

しかし、三人はそれぞれ問題に始末をつけ、国民の信任を失わぬどころか敬愛を得ていく。このへん、最近の首相たちが支持率低下に見舞われ続けているわれわれとしては、うらやましくなってしまうところである。日本・アメリカ連合と北朝鮮の間の一触即発の危機を、臆せず大国をたしなめるみごとな決断で収拾する青年大統領……こんな政治指導者がいればねえ。

ま、韓国だって現実にはイ・ミョンバク大統領はこんなにカッコ良くない。何かと政治に失望気味の今、せめて映画の中だけでも支持したくなるような政治家の人間臭い多様なキャラクターを楽しみたいではないか。



©2009 CJ ENTERTAINMENT INC., ALL RIGHTS RESERVED

『グッドモーニング・プレジデント』

監督・脚本：チャン・ジン
出演：チャン・ドンゴン、イ・スンジェ、コ・ドゥシムほか
2009年／韓国／2時間12分
●東京・シネマート新宿（☎03・5369・2831）ほかで上映中

美術

ただいま詩的に建設中

シャンティエ・ポエティック・イン・プログレス

病院でアートに何ができるか

中村富美子
なかむら　ふみこ
ジャーナリスト

六月、日仏交流事業の一環で来日した現代舞踊家フィリップ・シェエールが、東北芸術工科大学、東京都現代美術館、京都大学他でワークショップ、講演、公演を行なった。

シェエールは数年来、病院でアートを実践してきたアーティストである。ハンチントン病の父を持ち、不随意の「踊るような」動きを身近で見つめ、それゆえの患者の社会的疎外にも敏感だった彼が、表現としてのダンスと、症状としての身体の動きを結ぶ試みに向かったのは、必然かもしれない。

病院で、アートに何ができるのか。

フランスでも未開拓の分野で、医療と社会福祉、教育の狭間でアーティストが試行を繰り返しているのが現状のようだ。それでも治療効果を含めて芸術の必要性が認識され、ここ一〇年で「病院における文化」プログラムも浸透し始めた。シェエールが参画したパリのサルペトリエール病院では、誰が患者で誰が医師かもわからない共同のパフォーマンスを実現し、身体表現者として平等に立つ可能性を示した。

日本でも舞踏家と連携し、患者らとワークショップを行なっている。ある参加者は「患者でない人もふくめ、他者と一体化できた初めての体験」に興奮し、その時空を美しいと表現した。

言語以上に文化や社会のコードに縛られた肉体を解放するのは困難な作業だ。一方的な治療でなく、家族や医師を含めさまざまな身体が交わり、表現を通じて新たな社会空間をつくること。今回のプロジェクトで「詩的に建設」するのは、そうした壮大な空間なのだろう。シェエールの今後を見続けたい。

東京都現代美術館でのパフォーマンス。一般見学者も飛び入りで参加した。
©Laurent Chéhère

■フィリップ・シェエールの日仏交流プロジェクト「シャンティエ・ポエティック・イン・プログレス」は6月をもってすべて終了。